

『本朝二十不孝』研究史ノート (三)

——多声的な「はなし」の空間をどう捉えるか——

有働裕

本稿は、『国語国文学報』第六二集（平成一六年三月）の拙稿『本朝二十不孝』研究史ノート（一）および『国語国文学報』第六三集の拙稿『本朝二十不孝』研究史ノート（二）』（平成一七年三月）に続くものである。

本稿においては、先の二稿と多少重複させつつこれまでの争点を概観した上で、多声的なこの作品をどのように読み解くのかという観点を中心に、問題点を整理して今後の可能性について言及してみたい。

一、教訓、批判、そして「戯作」

『本朝二十不孝』における教訓的言辞と悪の現実的な描写との矛盾・分裂—これをどのように説明するのかわで、昔から研究者は頭を悩ませてきた。かつて片岡良一氏は、そこに分裂する西鶴像を見出した（注1）。それは無常観に支えられて徹底的に人間観照を貫こうとする態度と、現実的であるがゆえに世俗の

論理と妥協せざるを得ない姿勢との分裂であった。それは裏返せば、『本朝二十不孝』に一貫するものを見出そうとして果たせない片岡氏自身の苦悩の吐露でもあった。それゆえに氏の『本朝二十不孝』観は、われわれのこの作品に対する印象に比して、あまりに観念的な苦渋に満ちている。

こういったとらえ方は戦後も継承されていく。暉峻康隆氏の『西鶴評論と研究上』（注2）での見解は、西鶴自身は「人間の醜悪なる正体」を描く観照的態度を目指しながらも、説話文学本来の教訓的性格と興味本位の素材主義にふりまわされてしまった西鶴像を読み取るというもので、この作品そのものをあまり高く評価していない。江本裕氏も、孝を勧めようとする西鶴なりの倫理観と、倫理を踏みこじっていく現実を描写したいという思いとの、「二律背反的」な志向がこの作品に方法上の破綻をもたらしたとする（注3）。長尾三知生氏の見解（注4）もまた、この作品を、啓蒙教訓性と文芸性との「不孝な結合」としてとらえている。

このように、戦後の西鶴研究者もしばしばこの「分裂」の前で逡巡せざるを得ず、それを直視すれば、不完全な作品という否定的評価に行き着くことにもなりかねなかった。だが、この作品を積極的に評価しようとする研究者ももちろん少なくなく、その場合には、主として次の二つのうちのいずれかの方法が選択された。

一つは、野間光辰氏（注5）や水田潤氏（注6）のように、教訓を偽装として政道批判や現実暴露をこそ本音として理解する方法。いま一つは、檜谷昭彦氏（注7）や小野晋氏、横山重氏（注8）のように、その勸善懲惡的な結末を重視して現実描写を教訓性で取り込んでしまう理解の仕方であった。

前者の方向性に属する論稿としては、抑圧に対し自己主張した痛ましい人間存在を描いたとする植田一夫氏（注9）、序文で一見新しい孝道を説きつつも、実はそれらは幕府から禁じられている初物賞玩という奢侈であり、金銭しだいで可能な孝の実行が経済政策によつて阻まれているという現実をあえて無視して説くことで、幕府の孝道奨励策を笑殺したとする松田修の説（注10）、その松田氏の説を受けて幕藩体制に対するシニカルな批判を読み取ろうとした丸木一秋氏の論（注11）を加えることができ、藤川雅恵氏も、孝道奨励策をかかげた綱吉へのささやかな挑戦状という読み方を提示している（注12）。

また、幕藩体制や孝道奨励策に対する批判とまではいわずとも、教訓的言辞を西鶴の本音としては受け止めず、もっぱら現

実描写に重点を置いて読み取ろうとするものを、それに近いものとして分類することができよう。西鶴の描いた不孝者たちを儒教的な立場から裁断せずに、「世間Ⅱ共同体」から逸脱し「常の人」として生きていけない人間像を描いて、子に対する親の心情を描いたとする三浦邦夫氏（注13）、町人社会の状況に起因するさまざまな悪を造形したとする浮橋康彦氏（注14）などの論稿がそれである。石原千津子氏は、孝不孝は問題の契機に過ぎず、不孝話が終ったところから親や世間に内在する悪の問題が見えてくるのがこの作品であるとし（注15）、西島孜哉氏も「常ならざる身過」と「人心」を語るために不孝話の形式を借りたに過ぎない章が少なくないとしている（注16）。また、特に女性主人公の登場する章段に注目して、不孝者を生み出した原因を親や家からの抑圧として読み解く早川由美氏の説（注17）がある。さらには、教訓・批判いずれにも統一することはできないとして「悪の魅力」や「人の心の不可思議」を描いたとする堀切実氏の説もこの系譜に含めることができよう（注18）。

その一方で、後者の、西鶴の教訓的意図を前面に打ち出しつつ読もうとする説も、途切れることなくその系譜が続いている。それらには、儒教的教訓性ではなく民話の型による教訓性を読み取ろうとする森山重雄氏の論（注19）、老人への虐待や嫁姑の關係への民衆の思いを読み取ろうとする佐々木昭夫氏の論（注20）なども含めることができる。それらの多くは、松原秀江氏が、

『本朝二十不孝』の各章の展開を教訓書や仮名草子類の論理の枠内に収まるものであることを強調したように(注21)、同時代の儒教との関連性を指摘するもので、原本直子氏も同様の論証を試みている(注22)。本田(平林)香織氏も、序文の「孝にす、むる一助ならんかし」は屈折した表現とは言えず、字義通りに解釈すべきと主張し(注23)、また、立道千晃氏は、当時の町人の「家」に対する関心の高まりを背景に、「家業Ⅱ孝」という新しい考え方による教訓を説く西鶴像を読み取っている(注24)。この立道氏の発想に近いものは、この作品の創作視点は人の孝・不孝によって榮枯盛衰が左右されるといふ「家」の不安定さにあつた、とする森田雅也氏の説にも見ることができ(注25)。そして近年に至つても、長谷川強の「教訓も慰みである」という理解(注26)をふまえて、勝又基氏は、教訓自体に一種の娯楽性があつたとして、孝道奨励の姿勢を積極的に読み取ろうとする説を提示している(注27)。

しかしながら、いずれの立場で読み直してみようとも、割り切れない印象が残ってしまうのが『本朝二十不孝』という作品である。

先の二つの立場は、一見真つ向から対立する読み方でありながら、現実には真面目に向き合おうとする作家の姿勢を読み取る点で、実は共通している。それぞれを、徹底的な人間観察を貫くという形で現実とかかわつた西鶴と、世俗の秩序に対する責任感から教訓的な態度を捨てられなかつた西鶴、というように

言い直してみるならば、片岡良一氏が悩んだ矛盾・分裂のうちの一方を継承していったことが明確になる。

この発想を根こそぎ否定してしまつたのが谷脇理史氏の「本朝二十不孝」論序説(注28)である。氏はこれまでの論の前提を否定し、西鶴にはそもそも現実に真面目に向き合う気持ちなどはなかつた、『本朝二十不孝』は「戯作」であり「慰み草」なのだと主張した。

現実描写と教訓の同居は、決して矛盾や分裂ではない。その落差こそが笑いをもたらす要素であつた。現実描写はひたすら読者を面白がらせるサービスであり、教訓は読者の常識的教訓の確認である。「戯作」としてとらえるならば、この二つの同居に対して片岡氏のように悩むこと自体が極めて笑止なものになる。そして、その後この「戯作」説に触発された研究者による論文が次々と発表されることとなつた。その一つの形が『本朝孝子伝』との関連を俳諧的連想を用いた「謎解き」として読むという佐竹昭広氏の論であつた。この方法が谷脇氏の言う「戯作」とは異なる発想の上に立っていること、そしてやがてこの方法が行き詰まりをみせたことは既に述べた(注29)。

一方、谷脇氏が本来意図して用いた「戯作」の字義―「面白さ」「慰み草」の提供―を敷衍させていったものとして、熊崎紀代子氏(注30)、藤原聖子氏(注31)、藤江峰夫氏(注32)らの論稿をあげることができる。また、孝・不孝の二項対立が無意味化されていくような特殊な談理の性格を指摘して、どのように

話を創り話を語るかということそのものが問題になるといふ森
耕一氏の論もこの系列に加えることができよう(注33)。

しかしながら、『本朝二十不孝』を「面白さ」という切り口
だけで片付けてしまうことに抵抗を感じ、教訓的言辞や現実描
写、そして戯作的滑稽味が混在することに何らかの意味を見出
し、作品の全体性を新たな観点から読み解くことを試みた論稿
もあつた。本稿ではそのような、「もう一つの系譜」から今後
の『本朝二十不孝』研究の方向性を考えてみたい。

二、アイロニイとしての孝道奨励—矢野公和氏の論

矢野公和氏の「『本朝二十不孝』論—アイロニイとしての孝
道奨励について—」(注34)は「戯作」説に反論を試みた論文の
一つである。

たとえば巻四「枕に残す筆の先」の、嫁を家出に追いやった
という引け目から姑が食を絶つて自殺し、息子夫婦もその後の
悪評のために刺し違えて死んでしまうという展開には、笑いの
要素が極めて乏しい。とても笑って済ますことのできる話では
ないのである。また、教訓的な言辞も記されていない。

そして、すさまじいまでの親不孝者の所業の数々は、ほとん
どが先行の孝行説話の逆設定であつたり親不孝話の変形であつ
たりする。そういった創作方法によつたものが、単に「常識的
立場から面白おかしく語る」という無色透明のものであるとは

思えない。ここには何かアイロニカルなものが含まれていると
矢野氏は考える。

幕府は忠孝札を全国に立て、「天」に代つて秩序維持を試み、
孝行者・不孝者に賞罰を与える。これによつて、人倫の道に外
れたもの、常ならぬ人は人としての資格を失うことになる。し
かし西鶴は序文に言う。「常の人稀にして悪人多し」と。西鶴
にすれば、常ならぬものこそが人間の本質であつた。「封建社
会に於いては武士が独占していた人倫の道から外れた、人間外
的な存在とされた町人の自己肯定」を主張しようとする西鶴の
意識を矢野氏は読み取る。西鶴はそのような常ならぬ人の姿こ
そを描きたいのだが、当時それを肯定するような論理を持ち得
なかつたであろうし、仮に持ちえたとしてもそれを表明し得る
ような状況ではありえなかつた。そこで西鶴は「常ならぬ人は
悪人であるとし、不孝を戒め、否定する側に開き直ることによ
つて、自らを含めた常ならぬ人間を所謂観念世界の高みにまで
引き上げよう」としたというのである。言ってみれば、常なら
ぬ人が「人」の範疇から除外されてしまうような武家の論理に
抵抗し、たとえ否定的ではあつても常ならぬ人間の存在を讀者
の意識に刻みつけることに西鶴は賭けたのだ、ということだろ
うか。

巻一の二「大筋季にない袖の雨」では、『二十四孝』の「黃
香」「孟宗」の親の所業をそのまま子供に要求にすりかえる。
不孝者文太左衛門のやることは実は孝子譚の親の所業そのもの

だという逆説的事実は皮肉としかいいようがない。しかもその文太左衛門のすさまじい悪行の前には、献身的な妹の孝行も全く無力である。氏はこれについて、「恐らく西鶴は、孝子譚の倫理を無力化してしまうような人間の本性につき当たっている」と述べる。このような不孝ぶりが描かれる一方で、談理・教訓の姿勢も強固に見られる。だがそれは、強固であればあるほどアイロニーが深まっていくようなパラドシカルなものである。なぜこのような書き方を西鶴は行ったのかという説明を、綱吉の孝道奨励策への批判へと安易に結びつけることを避けて、西鶴の屈折した心理へと推論を展開させたわけである。

確かに『本朝二十不孝』には単に笑って済ますことのできないアイロニカルな側面、シニカルな眼差しを見出すことができる。「戯作」とみなすことよってこれらを切り落としてしまうことには抵抗感があり、矢野氏の指摘は妥当なものとも言える。しかしながら、『二十不孝』の諧謔の陰に、飽くまでも彼の置かれた情況に忠実であろうとした西鶴の呻吟を見ることさえ出来る」という形でまとめられてしまった作者西鶴像は、片岡氏の提示したそれと類似してもいる。両者の差異を述べるならば、片岡氏が観照と教訓の間で悩み揺れ動く作者像を想定しているのに対し、矢野氏は教訓の側に開き直りながら観照を徹底するという「ふてぶてしさ」を読み取るうとしているということになるか。

三、行きすぎた孝が胚胎する悪——箕輪吉次の論稿

矢野氏のアイロニカルな視点を継承しつつ、典拠との比較検討を軸に作品論的な読みの密度をより高めていったのが、箕輪吉次氏の一連の論稿であった。

氏はまず昭和五十一年に「『本朝二十不孝』論——先行不孝説話との関係を中心に——」を発表する³⁵。氏の主張を要約すると次のようになる。

『本朝孝子伝』の盛行を意識したため、安易な編集態度や版面の不体裁をも残すほどに刊行を急いだと思われるこの作品に対し、「不孝」をテーマとしたことを過大に評価することは慎むべきである。幕政への批判などは出来得る情況ではなく、また、するつもりもなかった。そして、『新因果物語』として改題刊行された事実は、この作品を教訓書として読んでいた読者の存在を示している、と。しかしながら氏は、教訓書として読むことを主張したいわけではない。

先のような前提に立って考えてみても、先行する不孝説話にくらべて『本朝二十不孝』の各話あまりに異質である。何が不孝であるかが一読しただけでは不明確であり、他の孝子説話・不孝説話と関連させて読まなければそのことがわからないような書き方となっているのである。

このような印象に基づく氏の理解は、それらの先行説話群の

中に『本朝二十不孝』を置いて見直して見なければ読み解くことはできない、というものである。これは、単なる「典拠探し」とは根本的に発想を異にするものである。

この論文で具体的に扱われているのは、巻二の二「旅行の暮の僧にて候」である。『新著聞集』や『慶安元禄間記』『久夢日記』などを手懸りに、実際にあった事件を素材としつつも、それをあえてあらぬように振っていく手法を指摘する。そして、「小判といふ物見しりけるも不思議なり」という不自然とも言える記述があえて挿入されていることから、金にまつわる不孝咄であることを明確化する。小吟の、一家の生活の苦しさを思いやる孝心は、金とのかかわりによって、一家を破滅へと導く不孝へと変化する。このことを序文の金による孝行の強調とも関連させて、孝と不孝との差は、金銭や経済の状況の変化によって変わり得る紙一重のものとして示されている、という理解を示している。

西鶴は孝道を奨励しようとしているわけでも、批判しようとしているわけでもない。孝という概念そのものが、現実においていかにあいまいで多面的な意味を持っているかを示すこと。それこそがこの作品の、先行不孝説話の単純な構造に対する際立った特色なのだという主張で結ばれている。

幕政への批判など意図するはずもないとした氏ではあるが、もし西鶴が世間でいう「孝」という概念に対して深い疑念を持ち、それを相対化して描出する意志があったとするなら、それ

は結果的に幕府の孝道奨励策を皮肉なものになってしまっているのではないだろうか。この論文の段階では幕政への批判という意図を頑なに否定していた箕輪氏ではあったが、その後約十年を経て発表された二つの論文では、明らかに変化が見られるようになる。

昭和六十年の『本朝二十不孝』の背景―その二元的世界―（注36）で氏が取り上げたのは、巻四の四「本に其人の面影」である。

この一章は、まさに誰が不孝なのか判然としがたい一話といえることができる。母親に化けた狸を射殺した弟が里人から賞賛されていたのに、国守の沙汰によって一転して不孝者となり、手をあわせて成仏を祈るだけだった兄が孝行者として禄を与えられる、という結末の一章である。

箕輪氏は、まず典拠である『宇治拾遺物語』巻八の六「猟師ほとけを射る事」との関係から考察し、国守から不孝者とされた第八弥こそが真の孝行者であったとする。にもかかわらず弟は否定されてしまったのか。それは国守の沙汰によって「文武の達者」たちが詮議した際、「孝をすべてに優先させ、一元的に解釈してしまう」という綱吉治世下の特異な孝子称揚の論理を拠りどころとしてしまったからだとする。

その裏づけとして氏が示したのは、『古今犬著聞集』に記された「一度罪ありとして咎められながら、孝であることで罪を許され、賛美された」事件三例である。このような極端な事例

はこの時期特有のものであった。一方、同時代の記録でも『河内屋可正旧記』のように、孝ゆえの盗みに対してその罪を減ずるべきではないとする「二元的価値判断」も存在していた。

だとすれば、「本に其人の面影」は、孝の特殊なる考え方によつて八弥を悪人とし不孝者とする「為政者の僻事の物語」であるということになる。また氏は、「旅行の暮の僧にて候」についても、「小吟を悪人に仕立て上げていく親の僻事の物語」という新たな見解を示し、さらにこれらの章に胚胎していた視点が、『懷硯』の「憂目を見する竹の世の中」——行き過ぎた孝が胚胎する悪を暴いたもの——などの諸章へ発展していくと述べている。

続く『本朝二十不孝』「娘盛の散桜」考——春夏秋冬と五行説——（注37）では、卷三の二が取り上げられている。この一話の中で五人の娘の両親は、四女のお冬に対しては出家することを不孝として否定し、五女の乙女には出家を勧める。一つの行為がある時は孝であり、ある時は不孝であるという孝の概念の多層性がここでも指摘される。そして、そのような展開から浮かび上がってくるのは、世の外間にとらわれながら一元的な孝の概念からのみ行為を裁断しようとした、親の僻事の物語ということになる。そして、夫である山賊を手引きして我が家に盗みに入るといふ乙女の行為は、「姉四人の彦六夫婦への報いの要素」を持つものであり、「孝にのみ殉じねばならぬと宿命付けられた者達のせめてもの悪」なのであった、とする。

このように、当時の孝行・不孝説話群の中に『本朝二十不孝』を置いてとらえなおすという箕輪氏の方法は、幕府の孝道奨励策と対峙し、「僻事」を書き続けることでそれを相対化して見せようとする西鶴の姿を浮かび上がらせるに至る。ただし、それゆえに、教訓的言辞の存在は無視されがちとなっている。

四、忠孝札へ向けられた「銃口」——篠原進氏の論

箕輪氏と同様に、篠原進氏の『本朝二十不孝』論もまた、谷脇氏・佐竹氏・矢野氏らの論を批判的に継承し、孝子譚の逆設定や俳諧的連想といった手法を駆使して西鶴がこの作品に何を託そうとしたのかを解き明かそうとするものであった。

篠原氏の『本朝二十不孝』の空間」は昭和五九年に発表された（注38）。氏は「死一倍」を題材とした巻の一「今の都も世は借物」の末尾で、「欲に目の見えぬ金の借手は、今、思ひあたるべし」と、西鶴の視線が「明らかに銀貸屋と笹六の取り巻きとに向けられている」ことに注目する。笹六を悪に走らせた「死一倍」は、銀貸屋相互の熾烈な貸し付け競争の中から必然的に生まれた。だとすれば、西鶴は孝を個人的な徳目の問題としてではなく、時代と社会との関連、すなわち、都市化によって生じたひずみが生み出すものとして描いた。それこそが当世的な「孝」「不孝」の問題である。だから『本朝二十不孝』は、「二十四孝の古い善を否定的媒介としながら、新しい悪を

(都市)空間との絡みの中で剔出して行つた作品」だということになる。

言つてみれば氏は、教訓的言辭と現實的描写との矛盾・分裂を、一つの手法としてとらえようと言つてよい。教訓的言辭という古い枠組みを破つて現実が溢れ出ていく、という構図の提示を西鶴は意図していたこととなる。ただし氏の論文は『本朝二十不孝』の中に都市の問題を見出すことに主力が注がれ、このような矛盾・分裂を手法として分析することはない。この課題は、後で述べるように、大久保順子氏の論稿に受け継がれていくことになる。

先のような作品観を実証すべく、篠原氏はこの作品の全章に言及する。たとえば、巻一の二「大節季にない袖の雨」では目まぐるしく変わる都市生活者の嗜好に翻弄される伏見の人々の生態、巻二の二「旅行の暮の僧にて候」では熊野の山家の人々をも席卷する「金銭至上主義的都市の消費精神」、巻四の三「木陰の袖口」からは敦賀が「京阪の新しい文化の流入に伴い急速に都市化して行つた」ことによる必然的な悪の誘発を指摘している。そこではもっぱら俳諧的連想と従来の孝子譚の逆設定とによつて利のゆがみを描き出していく西鶴の手法が解き明かされているのだが、いったい西鶴の意図はどこにあったのか。この時点での篠原氏の解釈は、いささか教訓的なものに傾いている。たとえば、この論文の末尾では次のように述べられている。

なるほど、社会悪を剔出するということは、多かれ少なかれ御政道批判を内在させているものだし、そのことまでも否定するつもりはない。ただ『二十不孝』の場合、その社会悪を生み出す政治構造への遡及力は必ずしも強いとはいえないし、むしろ、どんな政治体制にあつても社会悪は存在するものとして、より現實的な対応をしているということとは言えるのではないだろうか。

西鶴の目は為政者の方へではなく、変動する現実社会に生きる町人の方へ向けられている。都市化の中を「家職に励んで金銭を獲得し、それを唯一の後楯として生き抜け」という西鶴のメッセージが託されているということになる。

平成十一年になつてから、篠原氏は「『本朝二十不孝』―表象の森」(注39)を発表する。

ここで篠原氏は巻一の二「大節季にない袖の雨」、巻三の二「先斗に置いて来た男」、巻四の三「木陰の袖口」、巻四の一「善悪の二つ車」の四章を再び取り上げて論述しているのだが、先の論文から十五年近く隔たったものであるだけに、その方向性はかなり異なっている。

たとえば「大節季にない袖の雨」については、まず「五香の宮」の表門の彫刻などの例をあげて伏見と二十四孝話話の深い結びつきを示し、そして、伏見城が廃された後の衰微と閉塞感から文太左衛門の「心の闇」を説明していく。ここまでは先の論述を緻密にしたともいえるのだが、氏はここで父親の果たし

た役割に注目する。

政治に翻弄され、被害者であり続けた伏見の運命。その換喩ともいふべき父親の愚痴が、文太左衛門の悪を可動させた。

不孝そのものの原因を親に求めていく読み―篠原氏は「親に胚胎した病巣が、親子の関係性の歪みの中で増殖を重ねて転移する」のが『本朝二十不孝』の基本的構想であるとまで断言する。しかしそれは、単に親の養育のあり方を問うレヴェルにはとどまらない。このあたりの論述はいささか飛躍しているようにも思えるのだが、巻四の一「善悪の二つ車」の背景が岡山藩主池田光政の文教政策であること、そしてその政策が当時硬直化していたことをふまえて、不孝者甚七の姿を「政權から排除されて流浪する弁慶のイメージが重ねられ戯画化された悲劇の英雄の新しい伝説」と見る。

かくして氏は、

つまり『二十不孝』の銃口は、「孝道奨励政策」そのものではなく、「忠孝札」に代表される当局の過剰干渉へと向けられていたのだ。

という結論に至るのである。

矢野氏が読み取った「常ならぬものこそが人間の本質」という認識を継承しつつ、篠原氏は、現実の前で逡巡する西鶴ではなく、積極的な体制批判者としての西鶴を提示したことになる。現世的な処世の術の提示へと収斂していった先の論文とはまっ

たく異なった結論に至っているといつてよい。

現実を鋭く別出する西鶴の記述。それによって暴露されていく為政者の欺瞞と愚行。典拠の調査と俳諧的手法の分析から出発して、こういったものへと矛先を向けていくようになっていった点において、箕輪氏と篠原氏は極めて類似しているように思われ、また一定の成果を挙げ得たように思える。となれば問題は、そのような西鶴の鋭い社会認識が、あまりにも凡庸な教訓的記述と共存していることをどのように考えるかである。

五、「評語」と「沙汰」―大久保順子氏の論

大久保順子氏は、平成四年に『本朝二十不孝』に関するふたつの論文を発表している。そこでは、この作品に見られる「矛盾」と「分裂」の諸相を作者自身の逡巡や気まぐれから結果的に生じてしまったものとしてではなく、一つの手法としてとらえようとする試みがなされている。「分裂」という作品の実態を直視しつつもそれを否定的評価と直結させる発想を排して、現実的描述と教訓的言辞との混在を積極的にとらえなおそうとするものである。

氏はまず、「本朝二十不孝」「跡の剥けたる嫁入長持」論―「評語」の表現をめぐって―（注40）において、巻一の三にあたるこの章の随所に「人がよき事あればとて脇から腹立けるは無理の世の人心」「此風義何国もかはる事なし」「縁結びて二た

び帰るは女の不孝是より外なし」といった教訓や評語が配されていながらも、それらが論理的にかみあつておらず求心力を欠いていることを指摘する。そして、これらのすれ違う言辞を統語的に把握することによって、文字通りの教訓以外の意味が生ずることに注目している。

加賀の絹間屋左近右衛門の母親は美人の娘小霧を溺愛し、その衣装に美麗の限りを尽くす。やがて娘は呉服屋に嫁入りしたものの、相手を嫌つて実家に戻ってくる。以後は結婚しては出戻りを繰り返して、十四歳から二十五歳の間に「十八所さらけ」うちに家は零落し、小霧は老いてすっかり醜くなつてしまふ。その様子は「徹底して「沙汰」の視線から描かれ」ており、小霧が出戻りを繰り返すに至つた理由を、内面の心理から直接詳細に説明することはない。むしろ散在する教訓的な評語のどれもがあまりにステレオタイプなものであることが、小霧の行為がそこに当てはまらないものであることを読者に感じさせ、その「たわいない」とも言えるその悪の本質を浮かび上がらせる。個々の評語や教訓的言辞同士、あるいはそれらと「事例」に小霧に関する具体的な描写との「すれ違い」が「不可視の登場人物内部を暗示する」というのである。

氏は続けて「『本朝二十不孝』と「沙汰」——卷三の二、四の二の方法——（注41）を発表し、そこでも同様の発想を敷衍させている。加えてこの論文では、谷脇氏が「咄の咄らしさ——西鶴の語り口をめぐって——」（注42）で提示した「本朝二十不孝」の

「戯作」的解釈をいかに克服するかということが強く意識されている。

卷三の二「先斗に置いて来た男」は「人の心ほどかはり易きはなし」という評語がまず提示され、続けて付合語的連想文脈を経て堺の「しまふた屋」の風俗記事的部分が展開する。谷脇氏の言うところの読者との常識的な共通認識の確認の過程であり、氏はそれを話芸的な可笑しみに近似したものととらえていたのだが、大久保氏はそれを「事件」の認識とかかわらせ、いかに「事件」を読者に認識させるかという手法の問題として論じようとする。地の文と登場人物のコメントとの連続性、叙述視点の錯綜、内容の多様性と論理の矛盾・ずれ、といった展開の中で累積されていく「常套的」な教訓的評語は、「常套的」であるがゆえに「事件」形象化のための（語りの自由さ）を保証するものになるという。

また、巻四の二「枕に残す筆の先」は、土佐の鯉屋助八家の嫁と姑の確執をめぐる話であるが、これもまた、嫁姑双方の立場からの微妙に主張の異なつた複数の「常套的」な評語が散在している。登場人物の行動の内面的な理由が記されないまま、外部からのこのような「沙汰」が記されていることにより、決して「常套的」な教訓や評語の中に収まり切ることのない真実が浮かび上がってくる。氏によれば、「この「事件」の本質は、（姑の邪見か煙の不孝かといった裁断をも超えて）煙・姑をめぐる「評語」の間に見え隠れするべく形象化された、鯉屋の

「家」の家族相互の強い「思ひ」と、その行き違いにある」ということになる。

大久保氏が、作品中に存在するさまざまな評語をポリフォニック（多声的）なものとして把握し、求心的な語り口（モノログ）では描写しきれない人物像を描き出す手法として明言したことの意味は大きい。しかしながら、いささか抽象的で難解な論理の行き着く先、たどりついた解釈は思ひのほか平凡で、従来から言われてきた、特異な「悪の造形」という見解を大きく超えるものではない。その点では、論理の緻密さと引き換えに、篠原氏の論が備えていた社会経済面へと広がる視点を欠いてしまっていると言えなくもない。

六、結びにかえて―杉本氏の論と今後の可能性

様々な教訓的言辭、現実的描写、諧謔的口吻が相互に関連しまた対立し合いながら進行して行く『本朝二十不孝』の語り口―「はなし」の在り方は、いったい何を浮かびあがらせるような仕掛けになっているのか。

近年は、この作品の背後に幕府や綱吉に対する皮肉や反発を読み取る傾向が強まりつつあるといえそうである。かつて「戯作」説を主張した谷脇理史氏も、次のように述べている。

やはり『二十不孝』の場合にも、五代將軍の孝道奨励策をストレートに受け入れて、真面目に教訓するなどというふ

うな姿勢を西鶴がとっているとはとても思えません。むしろ、野間先生がやや強調しすぎるぐらい強調されたような方向で『二十不孝』を見ていったほうが、正解というより、その方が作品を面白く読めるのではないかと考えております。(注43)

前半の主張は以前からのものだが、後半の野間氏への支持はかつての持論の撤回とも受け取ることができ。

作品評価のこのような変遷の中にあつて、野間氏以来の幕政への批判・皮肉という系譜につらなる、近年の最も刺激的な解釈として、杉本好伸氏の論をあげることができる(注44)。

杉本氏はまず最終章である巻五の四「ふるき都を立出て雨」に、武家社会への皮肉が込められていることを指摘する。名のある武家の子である虎之助は、養父のために懸命に働くだけの勇氣も判断力も持っておらず、ただ貧窮を嘆くばかりである。また、そのような状況を実の親は援助していない。これが虎之助をめぐる「孝行のへ実態」であるのだが、それに啓発されて親不孝者の徳三郎が更生していく、という皮肉。そして、それらに対して「扱も頼もしき心底武家にもめづらし」と、武家社会の実態を顕示する言葉を「歴々の武士」に吐かせている。この、八百屋で物を買ってもできないという実態は、序文での八百屋で物を調べて孝行せよという記述との対応でよりいっそう強烈な皮肉となる。

そして、作者の目は厳として武家に向けられているとする杉

本氏は、卷二の二「旅行の暮の僧にて候」・卷四の一「善悪の二つ車」・卷四の四「本に其人の面影」などにも暴露的な皮肉が込められていて、これらは関連性を持ったネットワークで最終章とつながっているとす。

さらに、序文と最終章で提示されたへ八百屋は、將軍綱吉の孝の対象である桂昌院が八百屋の娘だという風説をも想起させる。このように極めて手の込んだ形で皮肉を盛り込み、忠孝を強く説いて厳罰を強いる為政者の姿に対する違和感を現実社会に直面する承認の立場から提示する、というのが『本朝二十不孝』に隠されている「構図」であったということになる。

八百屋と桂昌院との付会はいささか強引にも思え、また、『本朝二十不孝』の他の章における武家のとらえかたについても異論もあるところだろうが、少なくとも巻五の四の記述の中に「孝」というものの実態に疑問を抱かせるような、さまざまな相矛盾する要素が交錯していることは首肯できるといってよい。このような交錯する「声」の響き合いをどのように読み取っていくか。ここに、矢野氏、箕輪氏、篠原氏、大久保氏そして杉本氏と連なり、今後も発展していくだろうと思われる読みの可能性を感じ取ることができる。

これらの読みの方向性は、結論としては幕政や孝道奨励策への批判や揶揄といったところへと向かう。ただしそれは、かつての野間氏らの主張の復活というものではない。そのような批判や揶揄が直線的に述べられていたり、また、そのような本音

がただカモフラージュされているというのではない。教訓的言辭と現実的描写、世相への感想や諧謔的な口吻など、さまざまな相矛盾する要素のぶつかり合いの中で浮かび上がってくるものだとすることができ。パフチン流に言うならば、様々な声の響きあうポリフォニックな作品としてとらえた上で幕政への批判や揶揄を読み取ろうとしているのである（注45）。言ってみれば、作者のモノローグとして読むことの限界をふまえて、多声的な作品としての把握が定着しつつあるのが、近年のこの作品の研究の方向性ともいえよう。

ともあれ『本朝二十不孝』の解釈の可能性は、単なる教訓性やあるいはそれに対する反発、底の浅い戯作（娯楽）性といったレベルを大きく超えていく。同時代の現実と、そしてその背後にあるものと、いったい西鶴はどのように対峙していたのか。その姿が、まさに西鶴のオリジナリティであるところの、ポリフォニックな「はなし」の方法の分析を通してなされなければならぬだろう。そう考えるならば、この作品の二十の章は、どれをとっても個々にはまだ極めて不十分にしか読み解かれていないということになろう。（完）

（注1）片岡良一『井原西鶴』至文堂・大正一五年。

（注2）暉峻康隆『西鶴 評論と研究 上』中央公論社・昭和

一三年。

（注3）江本裕「『本朝二十不孝』——方法の破綻について」『文

芸と批評』八・昭和四十年六月。『西鶴研究—小説篇—』
新典社・平成一七年に再収。

(注4) 長尾三知生「『本朝二十不孝』小考—その観念性をめぐって—」『近世文芸研究と評論』一五・昭和五三年十月。

(注5) 野間光辰「西鶴と西鶴以後」『岩波講座日本文学史』
卷十近世・昭和三四年。『西鶴新新攷』岩波書店・昭和
五六年に再録。

(注6) 水田潤「『本朝二十不孝』その戯作性についての一考
察」『立命館文学』一〇八・昭和一九年五月。『西鶴論序
説』桜楓社・昭和四八年に再収。

(注7) 檜谷昭彦「『本朝二十不孝』『国文学解釈と鑑賞』昭和
三十五年十月。

(注8) 岩波文庫『本朝二十不孝』解説・昭和三十八年。

(注9) 植田一夫「『本朝二十不孝』論『日本文学』二五卷八
号・昭和五一年八月。

(注10) 松田修「『日本古典文学全集井原西鶴集(二)』解説、
小学館・昭和四八年。

(注11) 丸木一秋「『本朝二十不孝』私論」『愛媛国文研究』二
七・昭和五二年二月。

(注12) 藤川雅恵「諸国はなしとしての『本朝二十不孝』—卷
一の三「後の剥たる嫁入長持」と卷四の二「枕に残す筆
の先」を中心として—」『青山語文』二七・平成九年三

月。

(注13) 三浦邦夫「『本朝二十不孝』論」『秋田工専研究紀要』
六・昭和四六年。

(注14) 浮橋康彦「『本朝二十不孝』における悪の造形」『新潟
大学教育学部紀要』一一卷一、昭和四五年三月。

(注15) 石原千津子「『本朝二十不孝』論」『叙説』三、昭和五
四年四月。

(注16) 西島孜哉「『本朝二十不孝』論序説—成立と主題と方
法」『武庫川国文』三三・平成元年三月。

(注17) 早川由美「『本朝二十不孝』の不孝娘譚—娘と世間を
めぐって—」『名古屋大学国語国文』八一・平成九年十
二月。

(注18) 堀切実「『本朝二十不孝』の創作手法—卷二—」『旅
行の暮の僧にて候』をめぐって—『早稲田大学教育学
部学術研究(国語・国文学)』四一、平成五年二月。後
に「読みかえられる西鶴」ペリかん社、平成十三年に再
収。

(注19) 森山重雄「西鶴の世界」5 歪められた青年の群—
『本朝二十不孝』—講談社・昭和四四年。

(注20) 佐々木昭夫「『本朝二十不孝』—善悪の二つ車』につい
て—」『文芸研究』一三九、平成七年五月。同『本朝二
十不孝』卷四の二—「枕に残す筆の先」について—
『日本文化研究所研究報告』三三、平成八年三月。

(注21) 松原秀江「『本朝二十不孝』論—存在の根拠としての親—」『語文』(阪大) 四一、昭和五八年五月。同「『本朝二十不孝』論—御伽草子とのかかわりを中心に—」『西鶴新展望』勉誠社・平成五年。

(注22) 原木直子「本朝二十不孝論—その方法を中心に—」

『東京女子大学日本文学』六一・昭和五九年三月。

(注23) 本田香織「『本朝二十不孝』に描かれた孝」『日本文芸論叢』五、昭和六一年三月。

(注24) 立道千晃「『本朝二十不孝』における孝道観—同時代意識からの再検討」『近世文芸研究と評論』三八、平成二年六月。

(注25) 森田雅也「『本朝二十不孝』における創作視点」『日本文芸研究』四二巻一号、平成二年四月。

(注26) 長谷川強「『西鶴を読む』笠間書院・平成一五年。

(注27) 勝又基「不孝説話としての『本朝二十不孝』」『国文学解釈と鑑賞別冊 西鶴 挑発するテキスト』平成一七年三月。

(注28) 谷脇理史「『本朝二十不孝』論序説」『国文学研究』三六、昭和四二年十月。『日本文学研究資料叢書 西鶴』有精堂・昭和四四年、『西鶴研究序説』新典社・昭和五六年に再収。

(注29) 拙稿「『本朝二十不孝』研究史ノート(二)—『戯作』説の展開—」『国語国文学報』六三集、平成一七年三月。

(注30) 熊崎紀代子「本朝二十不孝研究」『国文』(お茶の水女子大) 三九、昭和四八年六月。

(注31) 藤原聖子「『本朝二十不孝』研究」『広島女学院大学国語国文学誌』八、昭和五三年二月。

(注32) 藤江峰夫「『二休咄』の西鶴評—『本朝二十不孝』巻一の四私見—」『福岡教育大学国語国文学誌』八、昭和五三年二月。同「私攷『本朝二十不孝』」神保五彌編『江戸文学研究』新典社・平成五年。

(注33) 森耕一「西鶴中期の登場人物—その同質性と対比性—」『そのだ語文』二、平成十五年三月、『西鶴論—性愛と金のダイナミズム—』おうふう・平成十六年に再収。

(注34) 矢野公和「『本朝二十不孝』論—アイロニーとしての孝道奨励について—」『国語と国文学』五十巻六号・昭和四八年六月、『西鶴論』若草書房、平成十五年に採収。

(注35) 箕輪吉次「『本朝二十不孝』論—先行不孝説話との関係を中心に—」『学苑』四三三号・昭和五一年一月。

(注36) 箕輪吉次「『本朝二十不孝』の背景—その二元的世界—」昭和六十年一月『学苑』五四一号。

(注37) 箕輪吉次「『本朝二十不孝』『娘盛の散桜』考—春夏秋冬と五行説—」『学苑』五四九号、昭和六十年九月。

(注38) 篠原進「『本朝二十不孝』の空間—『弘学大語文』十号・昭和五九年三月。

(注39) 篠原進「『本朝二十不孝』—表象の森—」『青山語文』

二九号・平成十一年三月。

(注40) 大久保順子『本朝二十不孝』「跡の剥けたる嫁入長持」論―「評語」の表現をめぐって―『文化』(東北大学)平成四年三月。

(注41) 大久保順子『本朝二十不孝』と「沙汰」―卷三の二、四の二の方法―『文芸研究』平成四年九月。

(注42) 谷協理史「咄の咄らしさ―西鶴の語り口をめぐって―」益田勝実・松田修編『日本の説話5 近世』東京美術・昭和五十年、『西鶴研究論攷』新典社・昭和五十六年に採収。

(注43) 谷協理史「転換期の西鶴―貞享三、四年の作品と出版取締り令―」『西鶴への招待』岩波セミナーブックス・平成七年。

(注44) 杉本好伸「へ八百屋」の構図(上・下)―『本朝二十不孝』の創作意図をめぐって―『鯉城往来』六・七、平成十五、十六年。

(注45) M・バフチン、伊東一郎訳『小説の言葉』平凡社・平成八年。

(うどう ゆたか)